

2012年度予備教育夏学期半集中コースにおける
日本語スピーチへの取り組み
— 初級クラスでのSNSの活用 —

柳田 しのぶ 高原 真理

要 旨

本稿は2012年度日本語予備教育夏学期コースの初級クラスでの日本語スピーチへの取り組みについての報告である。過去の夏学期コースで実施したアンケート調査から学習者は「話す」ことに対して強い学習意欲を持つことが明らかになった。それを踏まえて本クラスでは、タスク重視の授業を行なうだけでなく、最終課題として日本語スピーチを取り入れた。その際、準備段階における原稿提出や最終発表時に録画した映像の内部公開にSNSの使用を試みた。

【キーワード】 夏学期半集中コース 日本語予備教育 スピーチ SNS

An Approach to Teaching Japanese Oratory to Learners
in the Summer Japanese Language Course in 2012 :
utilizing SNS in a beginners' class

YANAGITA Shinobu, TAKAHARA Mari

【Abstract】 This is a report on an approach to teaching Japanese Oratory to learners in the Summer Japanese Language Course (SJLC) in the 2012 academic year. The results of a past survey revealed that students of SJLC were highly motivated to learn to speak Japanese. Based on these results, in this class, we not only conducted a task-oriented classroom, but also introduced Japanese oratory as the final project. At that time, we made an attempt to utilize a social network service (SNS) for manuscript submission in the preliminary stages and for internal public presentation of images recorded at the time of the final speech.

【Keywords】 summer Japanese language course, Japanese intensive course, Japanese speech, SNS

1. はじめに

夏学期コースとは、筑波大学留学生センターで開講している予備教育の夏期コースのことである。留学生の日本語レベルに応じて半集中コースから集中コース¹まで柔軟にクラス設定されるのが予備教育の夏学期コースの特徴である。今年度は初級前期の半集中コースが2クラス、初級後期の集中クラスが1クラス設定された。夏学期コースは予備教育の春学期を受講した学習者が継続して夏学期コースを受講するのが通例だが、2011年度より予備教育受講者以外の補講コースを受講している学習者等、予備教育以外の学習者も受講できるようになった。それによって様々な学習環境の学習者がクラスに介すようになり、夏学期コースを受講する学習者が授業に求める学習項目も多様化してきている。その中でも会話等の話す授業を希望する学習者は少なくない。

日本語学習者は主に文法、そして「読む」「書く」「聞く」「話す」の4技能を学習するが、日本で生活する学習者は話す能力が低い、または学習したいという意識が強い傾向がある。石上ほか(2011)、石上ほか(2012)では夏学期コース修了後に学生に対してアンケート調査を行なった。その結果、夏学期コースの実施内容として会話や話すことに対して強い要望があることが分かった。よって過去の夏学期コースの実施内容、そして修了後の学習者アンケートの結果を踏まえ、本年度の夏学期コース初級クラスは4技能のバランスを考慮しつつも「話す」に特化したカリキュラムを作成した。しかし「話す」といっても、会話や発表など形式は多様である。話す練習は文法の授業内で実施しているが、発表となると文法の授業内で取り扱うことは難しい。発表は単体の発話活動であるが、筑波大学に在籍の留学生である本コースの学習者は、ゼミや研究会等において日本語で発表する機会が少なくない。ゆえに初級クラスの中では「スピーチ(発表)」を授業に取り入れることとした。

本報告では、夏学期半集中コース初級クラスの構成を紹介すると共にクラスで扱った日本語スピーチのカリキュラム作成からSNS²を使用しての学習者作成原稿の提出の試み、また日本語スピーチの実施までの一連の過程を報告する。

2. 夏学期コース初級クラスの概要

ここで本報告にて取り扱う日本語スピーチが組み込まれている夏学期コース内の初級クラスについて説明する。このコースは2012年7月2日から7月30日までの午前2コマの半集中コースであった。過去の夏学期コースの反省をもとにカリキュラムを作成したため、全体的に会話や聴解等のタスクや活動の多いスケジュールとなっている。このコースはコーディネーターを入れて計4名の教師が担当し、team-teachingの方法がとられていた。後述する日本語スピーチも同様に4名の教師によって実行された。

授業は1コマ目を漢字、2コマ目を文法とし、全40コマ20日間で約4週にわたるコース

であった。本報告で取り上げた日本語スピーチは2コマ目の文法の授業でSFJ（主教材であるSFJについては2.2で説明する）の13課まで学習した後に実施した。4コマにわたって準備をし、夏学期コースの最終日に発表を行なった。また成績評価については、2回の漢字テストの他にコース最終日に学習者に日本語スピーチを行なってもらい、そのパフォーマンスの評価も加えて最終成績とした。

2.1 受講者

このクラスの学習者は予備教育の春学期初級クラスを修了した11名と、補講コースの学習者1名であった。予備教育の春学期を修了した11名の国籍はインドネシア、エリトリア、オーストラリア、カンボジア、ケニア、フィリピン、ペルー、チュニジア（2名）、ブラジル（2名）であり、補講コースの学習者の国籍はベネズエラであった。学習者の日本語レベルは12名全員が初級前期だったが、先の11名は前の学期である春学期でSFJ vol.2のL11まで、1名はSFJ vol.1のL6まで終了していた。

2.2 受講内容

使用した主教材は筑波ランゲージグループの『Situational Functional Japanese vol.2』（SFJ）であり、本コースでは12課から13課までを実施した。また文法を補うものとして、SFJの副教材である、聴解『わくわく文法リスニング99』を使用し、さらに文法の授業からは独立して漢字の授業も行なった。漢字クラスでの使用テキストは『Basic Kanji Book vol.1』であった。漢字の授業では毎日6字の漢字を継続的に学習し、途中習得確認のために2回のテストを実施した。漢字テストのフィードバック時には、同じ時間に書道活動を取り入れ、学習者の集中力が切れないように漢字学習だけでなく漢字を使用した活動も充実させた。

3. 日本語スピーチの概要

夏学期コース初級クラスではコース最終日に日本語スピーチを実施した。日本語スピーチのトピックは「日本に来てびっくりしたこと」とし、自分の国と比較して、なぜ驚いたのかを既習の文法を用いて説明してもらうことにした。日本語スピーチ時間は3分とした。

3.1 日本語スピーチの位置づけ

日本語スピーチを取り入れたのは、前述した通り、夏学期コースの過去のアンケートで、4技能の中でも特に話す技能の向上を求める学習者が多かったためである。日常会話についてはSFJのConversation Drillsを使用して、初級クラス内の授業で十分な練習ができるようにカリキュラムを設定した。しかし、本コースの学習者は大学院入学後、ゼミ等で

発表を行なう機会も多くなり、日常会話とは異なる、公的な場で複数の聞き手を相手にした日本語を話すことも求められるようになる。本クラスでは研究発表が行なえるような高いレベルを要求することはできないが、少しでも発表で使う定型表現に慣れてもらうことが今後の学習にとって有効であると考え、その橋渡しとして日本語スピーチを取り入れることとした。

また、日本語スピーチを取り入れることによって、その準備過程において、発表原稿を書く、クラスメイトの書いた原稿を読んで自分の原稿修正の参考にする、クラスメイトの発表を聞く、それに対して自分の意見を述べる、というように4技能を総合的に使うタスク設定が可能になる。よって初級クラスの最終課題として適当と考えた。

以上が本クラスにおいて日本語スピーチを取り入れた理由である。

3.2 日本語スピーチ準備へのSNSの活用

クラス最終日の日本語スピーチに向けた授業内での活動は、夏学期コース全40コマの内、5コマで行なった。5コマの内1コマは日本語スピーチに関するオリエンテーションの時間にあて、1コマを発表にあてた。ゆえに授業内での準備は実質3コマであった。しかし日本語スピーチを行なうには、原稿の推敲と日本語スピーチの練習が必要であるため、それら両方を授業時間内で行なうことは難しく、3コマの準備日が連続していることから、授業日に宿題として原稿を学生から受け取って教師が添削するのでは間に合わないという事情があった。

そこで、原稿の提出はインターネット上で行なってもらうこととし、その方法として今回はSNSを利用した。SNSを日本語教育に生かした取り組みはまだ十分には行われていないものの、大塚(2008)によるSNSを利用した日本語作文授業の取り組みがある。大塚はSNSの効果として、学生達がSNSによる延長授業によって個別作文添削指導を受けられたことにより、短期間で学習効率が高まった点を挙げている。

今回、夏学期半集中コース初級クラスで使用したSNSは「日本語学習SNS」³である。これは、日本語・日本事情eラーニングの開発拠点としてシステム・コンテンツの開発・配信を行なっている筑波大学留学生センター日本語・日本事情遠隔教育拠点が開発したSNSで、日本語学習に特化したものである。初級者であっても簡単に使えるシンプルなシステムとなっていることがその特徴として挙げられる。

使用したのは、このサービスの中の「グループ」と呼ばれるものである。これは利用者の一人が「グループ」ページを作成すると、そのページを閲覧できるのは作成者の許可を得たメンバーだけに制限できるというシステムである。今回の場合は、教師が「D午前クラス」というグループを作成し、このクラスを担当する他の教師と履修する学習者だけがメンバーとなった。図1はこのグループのトップページ画面である。グループを作成する

と、図1の中ほどにある「グループトピック」という欄を使用することができ、ここでは、メンバー全員が掲示板形式でのコミュニケーションを行なうことが可能となる。日本語スピーチの原稿提出は、このグループトピックに書き込む形で行なってもらった。



図1 「日本語学習SNS」のグループページ画面

インターネットでの原稿提出は、メール等の利用も可能であるが、今回SNSを取り入れたのは以下の理由からである。

- (1) 学習者の原稿を複数の教師が同時に把握できる
- (2) 学習者がクラスメイトの原稿を閲覧できる
- (3) 学習者の原稿を初稿から最終稿まで記録することができる

まず(1)についてだが、本コースは複数の教師によるteam-teachingのため、学習者の原稿は教師全員が共有することが求められる。しかしメールで提出とする場合、送信者の負担が大きくなってしまいうという欠点がある。しかしSNSを利用すれば、登録者全てが閲覧できるため、提出上の負担が軽減されると考えた。また、メールでの送信の場合、全ての作文を一度に表示させることは難しいが、SNSであれば一覧表示が可能であるという利点もある。(2)については、メール上の提出となると教師と学習者間だけのやり取りとなるため、クラスメイトの原稿を学習者が目にするのは難しい。しかしSNSを利用すれば、メンバー全員が閲覧可能となり他の学習者が書いた原稿を読んで参考に学習者自身の原稿

を加筆修正することもできる。(3)については、紙媒体での提出では、修正箇所について教師から指摘を受けた学習者が、その部分を消して修正してしまうことが多い。しかし、自分が何を間違えて、それをどう直したのか、という情報がきちんと残してあれば、学習の助けになると考えられる。SNSを利用すれば、すべての原稿をポートフォリオとして蓄積していくことが可能なため、修正過程を見ることができるというメリットがある。

以上3点がSNSを利用した理由である。

3.3 日本語スピーチ準備の手順

次に、授業内での取り組みとSNS内での取り組みについて説明する。具体的な手順は図2の通りである。

図の左側が授業内で行なう活動で、右側がSNS内で行なう活動である。まずオリエンテーションで、教師(T)が日本語スピーチおよびSNSについて説明し、日本語スピーチ原稿(初稿)を期日までにSNS上で提出するように指示をする。なお、原稿提出のことを図内ではUPと示している。学習者(S)が提出した原稿を教師は添削し、それを準備1回目の授業で返却する。その際、教師は修正の必要な箇所に添削記号のみを記入し、学習者自身に修正方法を考えさせることとする。学習者は個人もしくはペアで原稿を修正し、教師のチェックを受けるが、日本語の修正だけでなく、より発表スタイルに近い原稿となるよう教師は指導を行なう。そして学習者は授業後に第二稿をSNS上で提出する。準備2回目では、学習者は教師のチェックを受けた第二稿を使ってスピーチ練習を行ない、教師とクラスメイト(SS)から内容についてコメントをもらい、それを反映させた第三稿をSNS上で提出する。そして準備3回目では、教師の修正を受けた第三稿(最終稿)を使って再度スピーチ練習を行ない、発表態度について教師およびクラスメイトがコメントをする。以上が日本語スピーチ準備の流れであり、これを踏まえてクラス最終日に日本語スピーチ発表を行なう。

3.4 日本語スピーチの評価基準

前述の通り、日本語スピーチは成績評価にも含めることとしたため、学習者には評価基準を予め示した。評価は、発表態度、流暢さ、正確さ、内容といった観点から設定した。最終日の日本語スピーチには、複数の教師が参加し、この基準をもとに評価を行なうこととした。また学習者同士でも評価を行なってもらい、「よく分かった」「おもしろかった」「発表が上手だった(ジェスチャー、アイコンタクト、声の大きさ)」の3点について評価するよう用紙を配布し、互いに評価を行なってもらうこととした。学習者には、あらかじめ優秀発表者を決めると伝え、複数の教師の評価点と学習者たちの評価点の合計点を算出して上位3名の学習者を発表する。学習者たちにも互いの評価を行なってもらうのは、準備の段階で学習者たちは互いの発表を2度聞くことになるため、最終日のクラスメイトの

日本語スピーチを積極的に聞こうとしなくなるのではないかと考えたためである。そこで、学習者自身にも評価を行なってもらうことで聞き手としての役割を与えることにした。そしてその評価を用いて優秀発表者を決定することで、スピーチ発表に対するモチベーションも高めてもらいたいと考えた。

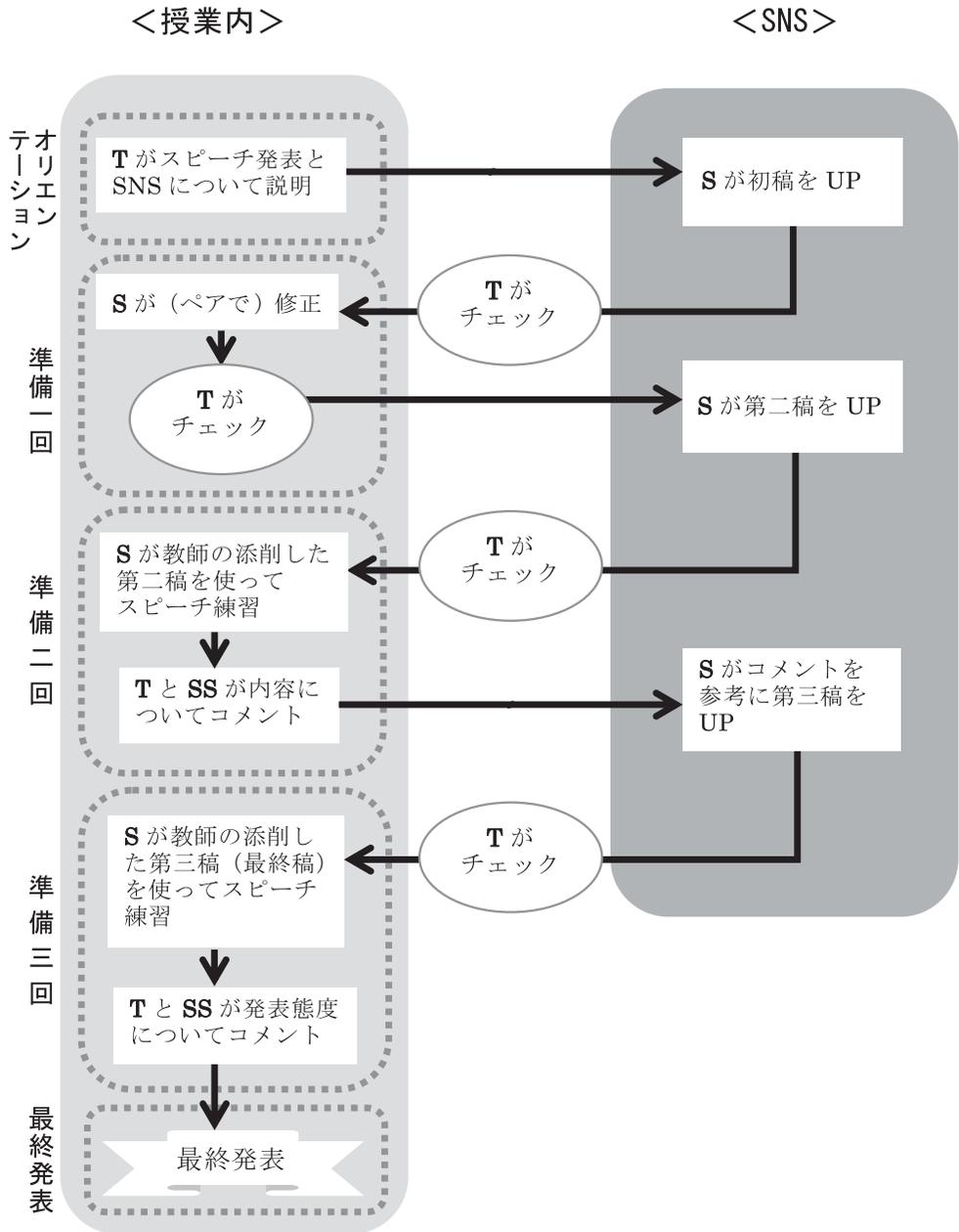


図2 スピーチ準備の流れ

4. 学習者の反応

ここでは実施した日本語スピーチの準備から発表までの学習者の反応を実際の学習者の日本語スピーチの原稿を提示しながら報告する。

4.1 準備段階

SNSを使用して間もなくは、表記が日本語のために使用方法や操作に苦労している様子がみられたが、1回目の原稿提出以降は操作で滞る学習者はおらず、その後の2回目、3回目の提出は比較的円滑にできた。このことはインターネット環境が身近にありfacebook⁴等のSNSに学習者が慣れており、キーボードでの文字入力に抵抗がなかったことに起因すると思われる。

表1は本コース受講者1名の初稿から第三稿までの3つの原稿の一部である。なお、文章はすべて学習者の原文⁵である。初稿ではAからGの文に至るまで言いたいことが先行し

表1 学習者の原稿（一部抜粋）

学習者の原稿 ○は誤用部分 __は修正部分		
初稿	A	さいごに、人のかんけいがちがいます。
	B	ブラジルのひとかんけいがちがい <u>て</u> す。
	C	ブラジルにはかんたんな友だちになります。
	D	いろいろなひとはいしょうにしたらともだちになります。
	E	でも、ゆうじょうがおわるとまちがえりました。
	F	にほんにはともだちになりますけどおくれると思います。
	G	プレゼントをあげて、くれて、 <u>くださ</u> って、 <u>さしあげ</u> て、話して、会って、とてもむずかしい <u>て</u> すね。
	H	そして、友だちになります。
第二稿	A	さいごに、人のかんけいがちがいますか。
	B	ブラジル人と日本人は <u>ち</u> よつとちがいます。
	C	ブラジルではかんたんに友だちになります。
	D	ブラジル人はいっしょに <u>いた</u> らともだちになります。
	F	日本人もともだちになりますけどおそいと思います。
	G	プレゼントをあげて、くれて、話して、会って。。そして、ゆうじょうになります。
第三稿 (最終稿)	A+B	さいごに、ブラジル人と日本人は <u>ち</u> よつとちがいます。
	C	ブラジルではかんたんに友だちになります。
	D	ブラジル人はいっしょに <u>いた</u> らともだちになります。
	F	日本人もともだちになりますけどおそいと思います。
	G	プレゼントをあげて、くれて、話して、会って。。そして、友だちになります。

ている文章になっているが、添削された原稿を確認して作成した第二稿では、その点が訂正されている。また初稿のEの文は学習者によって削除された。第二稿はより内容について考えられているが、推敲を試みた結果、間違った表現を使用している。再び添削された原稿をもとに作成した第三稿では、第二稿の誤用が訂正され、学習者自身によって最終校正がなされた。第三稿ではAとBの文が統合されている。このような過程を経て、間違いのない最終稿としての原稿となった。学習者はこの第三稿をもとに日本語スピーチを行なった。

またSNSは自身の書いた原稿だけでなく、他の学習者が書いた原稿も閲覧することができるため、教師が原稿作成を直接注意することなく、学習者の自発的な原稿の作成（自律学習）を促すことができた。そのひとつの例として、提出された原稿は短かったのにも関わらず、最終発表時ではもっとも長く発表した学習者がいたことが挙げられよう。クラスメイトの提出原稿を閲覧した学習者が自身で注意を喚起し、最後のもっとも長い発表につながったのだと思われる。

4.2 日本語スピーチ（最終発表）

ここでは、初級クラス最終日の日本語スピーチについて報告する。3.4でも述べたように、最終発表は教師と学習者がそれぞれの観点で評価することとしたため、授業の冒頭で評価について再度説明し、評価用紙を配布してから日本語スピーチを開始した。最終発表には合計4名の教師が参加し、1名はビデオ撮影を担当し、残り3名の教師が評価を行なった。学習者は1名ずつクラスの前に立って日本語スピーチを行ない、日本語スピーチが終わるごとに聞き手側の学習者達から評価用紙を回収した。全ての日本語スピーチが終わった段階で、一旦学習者をクラスの外に待機させ、その間に教師4名で全学習者の評価点を合計し、上位3名を決定した。その後クラスに戻った学習者に上位の発表者を伝えて総評を行なった。上述の通り、日本語スピーチはビデオによって記録したため、クラス終了後にYouTube⁶にアップロードした上で、そのリンクを日本語学習SNSのグループページに掲載し、メンバーのみが閲覧できるようにした。これは、ただ発表して終わりにするのではなく、自らの日本語スピーチを見て振り返りを行なってほしいとの考えから実施した。学習者達が実際に日本語スピーチの動画を見たかについては把握できていないが、撮影ビデオのSNSへの掲載については学習者に好評価であった。準備を何度も繰り返した上での発表だったため、その成果を自分自身で確認できるのは、学習者にとって良いフィードバックになったと思われる。

5. まとめと今後の課題

2012年度夏学期コースは4週間という短期間の半集中コースであり、学習者の習得や学習傾向を見て柔軟にカリキュラムが作成されるという予備教育の中でも特殊なコースであっ

た。今回の試みとして初級クラスではコース後半に日本語スピーチを行なった。準備の段階ではSNSを使用して学習者に原稿を書き提出してもらおうといったような授業外の活動もあった。一連の手順や最終日の発表は学習者におおむね好評であったが、以下の問題点も挙げられよう。

- ・学習者にSNSへの事前の登録を促す
- ・聞く姿勢に対する指導も入れる
- ・クラス活動ではなく外部の人に聞いてもらう機会をつくる

今回、授業内でSNSの紹介をして学習者に登録作業をゆだねる方法をとったが学習者全員が使用できるまでに時間がかかり、教師が授業外に学習者の登録を手助けする必要があった。この問題は事前に登録を済ませることで解決できる。また今回の授業内での準備は、発表と発表者の態度に関わる指導が主であった。発表を発表者と聴講者との活動と捉えると、聞き手に対しても何らかの指導が必要である。うなずく、メモをとる、質問する等、聞き手に対しての指導も準備の段階で取り入れられたなら、最終日本語スピーチもさらに活発なものになるのではないだろうか。さらに最終日本語スピーチについてだが、聴講者は夏学期コース初級クラスを担当した教師4名であった。12名の発表者に対して聴講者が少なすぎる印象であった。また発表者である学習者も、すでに内容を知っている教師やクラスメイトに対して日本語スピーチを行なったため、発表として新鮮味にかけられる様子が見受けられた。例えば日本人の学生を聴講者として募集するなど、対外的に開かれた活動として発展させるのも一案である。教師以外の聴講者がいることで、学習者も新たな気持ちで発表に臨むことができるだろう。

以上を問題点及び今後の課題としたい。

注

1. 半集中コースは75分の授業が2コマ、集中コースは4コマの授業である。
2. SNSとはSocial Networking Serviceの略称であり、人と人の社会的なつながり、コミュニティをインターネット上に構築するのを支援するサービスである。国内で有名なものとしては、mixiやfacebookが挙げられる。
3. 「日本語学習SNS」は2013年3月現在、筑波大学の関係者にのみ、そのURLが公開されている。
4. facebookとはSNSのひとつで現実の知り合いと連絡を取り交流するサービスのことである。
5. 学習者の原稿は本人の許可を得て使用している。

6. You Tubeとは、You Tube社が運営する動画コンテンツ共有サイトである。

参考文献

- 石上綾子・柳田しのぶ・宮崎恵子・平形裕紀子（2011）「2010年度日本語予備教育夏学期
コース報告」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』26：99-115
- 石上綾子・柳田しのぶ・田中孝始・小浦方理恵（2012）「2011年度日本語予備教育夏学期
コース報告」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』27：115-136
- 大塚薫（2008）「SNSを利用した日本語作文授業の試み-対面教育及び遠隔教育を統合した
授業-」『高知大学総合教育センター修学・留学生支援部門紀要』2：58-72
- 筑波ランゲージグループ（1992）『SITUATIONAL FUNCTIONAL JAPANESE VOLUME 2：
DRILLS』凡人社
- 加納千恵子・清水百合・竹中弘子・石井恵理子（1989）『BASIC KANJI BOOK VOL.1』
凡人社
- 小林典子・フォード丹羽順子・高橋純子・梅田泉・三宅和子（1995）『わくわく文法リス
ニング 99』凡人社

参考URL

- Facebook <http://www.facebook.com/>
You Tube <http://www.youtube.com/>